様式１
【公表用】

２１世紀ＣＯＥプログラム　平成１４年度採択拠点事業結果報告書

１．機関の代表者（学　長）	（大学名）慶應義塾大学	機関番号	３２６１２
	(ふりがな<ローマ字>) （氏　名）　安西　祐一郎（Anzai Yuichiro）		

２．大学の将来構想

慶應義塾大学の使命は、1858年創立以来150年近い研究教育・医療・社会貢献の実績を生かし、社会のリーダー育成と知的価値の創造を図り、日本と国際社会の未来を先導する原動力となることにある。世界的研究教育拠点の形成は、そのための、またこれからの日本と世界への貢献のための重要な手段である。2001年9月に塾長が発表した「慶應義塾21世紀グランドデザイン」に掲げた感動教育実践、知的価値創造、実業世界開拓の3つのメッセージのもと、大学の使命を果たすために、時代を先導する思想をもって総合改革を進め、世界的研究教育拠点の形成と世界最高水準の大学づくりについて、以下の点に焦点をあてて将来構想がなされた。

（1）博士課程教育の強化を図り、知的価値創造に関するトレーニングを十分に積んだ博士課程修了者を多数輩出すること。

（2）世界最高水準の知的価値創造を実現するべく「総合研究推進機構」を設置して、研究科・学部の縦割り研究教育体制を超えた創造的研究、外部組織との大規模な共同研究を全学レベルで展開すること。

（3）世界レベルの研究成果を上げるべく、各キャンパスに設置されている大規模な研究センター同士の連携を強化し、拠点形成プログラムとも連携を図り、全学的連携を作り出すこと。

（4）社会のさまざまな人や組織とタイアップを図るべく、先端的学術研究や産官学連携共同研究の分野で、従来のキャンパスとは異なる新しい研究教育の場を活用すること。

（5）国際社会に通用するプロフェッショナルな人材育成のために新たに３つの大学院／研究科を創設すること。

（6）大学に寄付されたチェアシップ講座の活用や、ティーチング・アシスタント（ＴＡ）、リサーチ・アシスタント（ＲＡ）制度の活用、研究費支給等の博士課程学生への支援を拡充すること。

（7）英語を主言語とした大学院プログラムや外国語教育、遠隔教育システムを活用するなどして、世界に通用する人間を育成すること。

（8）経営改革プロジェクト室を設置して国際競争力を保持するトップレベルの大学になるべく、合理的組織・経営システムの改革を実行すること。

慶應義塾大学のマネジメント体制は、経営最高責任者としての理事長と教学運営責任者としての学長を兼務した塾長のもとで経営、教学等のすべてが統合した体制がとられている一方で、その選任がすべての卒業生および教職員等の責任に委ねられている、という独自の特徴をもっている。

塾長は、慶應義塾の塾務について一切の責任を負うとともに、自らを筆頭とするマネジメント体制を整備してリーダーシップを発揮できる立場を与えられている。

このような塾長を中心としたマネジメント体制のもとで、慶應義塾は世界トップレベルの研究教育拠点を形成するべく、2001年に塾長が発表した「慶應義塾21世紀グランドデザイン」により、大学の発展へのビジョンが提示された。その後2002年に新しい研究教育を実現するための具体案を「総合改革プラン」として提示したことにより、世界的研究教育拠点への支援に直結する多くの改革が実行された。たとえば、新たなオーバーヘッドシステムの構築と研究教育支援を含む新しい学内予算措置の仕組みが構築されたり、総合的研究の推進・インキュベーション・起業支援・知的財産の蓄積と充実等の受け皿として「総合研究推進機構」を塾長のリーダーシップで創設したことにより、世界的研究教育拠点を形成するにふさわしい組織的な土壌が確立された。また、新しい大学院等の研究教育組織の創設に加えて、施設・スペースの充実のために、三田キャンパス新校舎の建築構想が生まれた。さらに、新しい研究教育拠点で活動する研究者や研究支援者のための柔軟な人事制度・給与制度の導入、有期契約教員制度の導入等、合理性と独立性を持った経営システムの実現が図られた。

３．達成状況及び今後の展望

2002年度採択の21世紀ＣＯＥプログラムでは、慶應義塾大学から5つの拠点が採択され、大きな成果を残すことができた。

博士課程の授与者は、21世紀ＣＯＥプログラム開始前の1998年～2001年度の平均約190名／年から、開始後の2002～2005年度には約260名／年と大幅に増加した。また、各研究拠点のリサーチ・アシスタント（ＲＡ）が多数活躍し、異なる拠点間でのＲＡの意見交換や合同シンポジウムなどを通し、ＲＡの教育が強力に推進された。

また、「総合研究推進機構」が、2003年に塾長のもとに設置され、研究の体系的な推進に大きな役割を果たし、さらに研究倫理や知的財産権の面でも主導的に機能している。そして、総合研究推進機構内に2007年2月に設置された先導研究センターのもとに、大型研究プログラムごとの研究センターを設置し、分野横断的かつ総合的な研究教育活動の土壌を作り出した。

産官学連携のために新しいキャンパスとして設置された「新川崎タウンキャンパス」及び「鶴岡タウンキャンパス」は21世紀ＣＯＥプログラムの重要な研究教育活動の場として活用された。

新たな大学院研究科については、2004年に設立された「法務研究科」に加えて、創立150年記念事業の一環として2008年4月にスタートする「システムデザイン・マネジメント研究科」と「メディアデザイン研究科」の創設が決定した。

国際的な活動を強化するために、塾長の名の下に2004年、「国際連携推進機構」を創設し、より戦略的かつグローバルに研究教育の展開がなされるようになった。また、グローバルな情報ネットワークを支える「デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構」を同年設立し、ケンブリッジやニューヨークなどに６つの海外拠点を創設した。理工学研究科や政策・メディア研究科では英語を主言語とした国際コースが設立された。

2002年に経営改革プロジェクト室が創設されたことにより、「財政・経営システム」、「人事・給与制度改革」、「病院経営改革」の3項目の改革が展開された。具体的には、各組織に予算裁量の権限が付与される仕組みが作られ、全塾レベルでの予算管理・評価システム構築が進んでいる。また、一部の教職員に年俸制が導入され、研究支援や国際連携支援などの専門職務の職員の人事制度が別途導入された。そして、支援・助言・監督を行う「病院経営ボード」を2004年に創設し、慶應義塾大学医学部と病院を合わせた消費収支差額を2003年度の約マイナス30億円から2005年度には約マイナス16億円に圧縮させ、病院単体ではプラスに転換するなど、病院経営の改善に成功した。

事業が終了した現在は、21世紀ＣＯＥプログラムに引き続き、世界的な教育研究拠点における活動を、さまざまな支援方法をもとに推進・発展させている。

学内予算措置として、研究者が使用できる大学の教育研究予算及び施設整備予算の一部をグローバルＣＯＥプログラムなどに振り分け、順調に増加している外部研究資金の間接経費／オーバーヘッドを研究支援体制の整備や研究施設の充実に今後活用していく。

教育研究組織の改革として、創立150年記念事業の中で設立が決定した新たな大学院研究科や今後設置が予定されている大学院との連携も図る。また、先導研究センター内の各研究センターが国内外の教育研究拠点との密接な連携関係を築き、また発展させていくために必要な支援を行っていく。

施設・スペースの整備としては、21世紀ＣＯＥプログラムで活用した３キャンパスの研究センターと２つの新キャンパスの施設に加えて、創立150年記念事業の中で、新たな施設を建設し、十分な施設環境を整える。

研究者・教員及び教育研究支援者の措置では、グローバルＣＯＥプログラムの拠点形成プログラムで多数の特別研究教員を活用するなど、専任教員のほかに有期契約教員を多数雇用する。また、従来から実施してきたリサーチ・アシスタント（ＲＡ）、ティーチング・アシスタント（ＴＡ）制度をさらに充実させ、博士課程の学生を支援し、支援と教育研究活動を充実させる。

以上のような支援体制を基盤に、総合研究推進機構長、国際連携推進機構長およびデジタルメディア・コンテンツ統合研究機構長も兼ねる塾長を中心としたマネジメント体制のもとで、国際的な教育研究ネットワークを重視した、世界最高水準かつグローバルな教育研究環境の構築を今後も進展させていく。

様式２
【公表用】

２１世紀ＣＯＥプログラム　平成１４年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	慶應義塾大学	学長名	安西祐一郎	拠点番号	D15
１．申請分野	A<生命科学>　B<化学・材料科学>　C<情報・電気・電子>　(D<人文科学>)　E<学際・複合・新領域>				
２．拠点のプログラム名称（英訳名）	心の解明に向けての統合的方法論構築 (Toward an Integrated Methodology for the Study of the Mind)				
研究分野及びキーワード	<研究分野: 哲学 >(認知哲学)(思考)(言語)(比較思想史)(生命倫理)				
３．専攻等名	文学研究科哲学・倫理学専攻、文学研究科美学美術史学専攻、文学研究科史学専攻、文学研究科国文学専攻、文学研究科中国文学専攻、文学研究科英米文学専攻、文学研究科独文学専攻、文学研究科仏文学専攻、文学研究科図書館・情報学専攻、社会学研究科心理学専攻、社会学研究科教育学専攻、言語文化研究所				

４．事業推進担当者　　計　２０　名

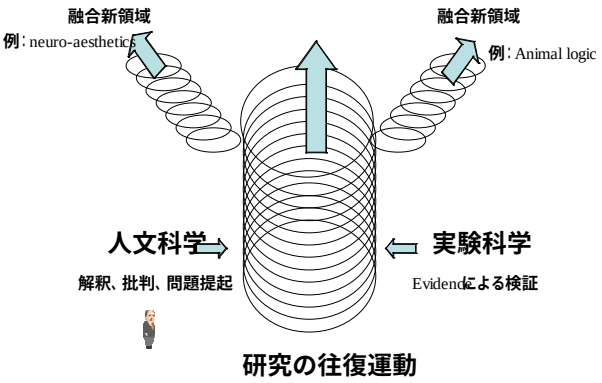
ふりがな<ローマ字> 氏　　名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学　位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)
(拠点リーダー) NISHIMURA Taro 西村　太良	常任理事 文学研究科委員長、英米文学専攻・教授	西洋古典学 文学修士	拠点リーダー、プログラム総括、古代心性の分析
OKADA Mitsuhiro 岡田　光弘	文学研究科哲学・倫理学専攻・教授	論理学 文学博士	心の知的働きに関する論理学的研究
NISHIWAKI Yosaku 西脇　与作	文学研究科哲学・倫理学専攻・教授	科学哲学 文学修士	心の知的働きに関する科学哲学的研究
IIDA Takashi 飯田　隆	文学研究科哲学・倫理学専攻・教授	言語哲学 文学修士	心の知的働きに関する言語哲学的研究
SAITO Yoshimichi 斎藤　慶典	文学研究科哲学・倫理学専攻・教授	現象学 博士（哲学）	心の知的働きに関する現象学的研究
WATANABE Shigeru 渡辺　茂	社会学研究科心理学専攻・教授	実験心理学 文学博士	心の発達と進化に関する比較認知科学的研究
ANDO Juko 安藤　寿康	社会学研究科教育学専攻・教授	行動遺伝学 博士(教育学)	心の発達と進化に関する行動遺伝学的研究
ITO Yuji 伊東　裕司	社会学研究科心理学専攻・教授	認知心理学 文学修士	心の発達と進化に関する認知心理学的研究
TARUI Masayoshi 樽井　正義	文学研究科哲学・倫理学専攻・教授	生命倫理 文学修士	心の発達と進化に関する倫理学的研究
OTSU Yukio 大津　由紀雄	社会学研究科教育学専攻・教授	言語心理学 Ph. D.	心の発達と進化に関する認知言語学的研究
KAWAGUCHI Junji 川口　順二	文学研究科仏文学専攻・教授	対照言語学 仏国家博士	心の発達と進化に関する言語・文化的対照研究
MATSUDA Takami 松田　隆美	文学研究科英米文学専攻・教授	中世英文学 D. Phil.	心と表象に関する表象史的研究
TAKAMIYA Toshiyuki 高宮　利行	文学研究科英米文学専攻・教授	中世英文学 Litt. D.	心と表象に関する比較表象史的研究
MAEDA Fujio 前田　富士男	文学研究科美学美術史学専攻・教授	芸術学 文学修士	心と表象に関する芸術学的研究
SUMI Yoichi 鷲見　洋一	文学研究科仏文学専攻・教授	表象史 仏文学博士	心と表象に関する表象史的研究
UEDA Shuichi 上田　修一	文学研究科図書館・情報学専攻・教授	図書館･情報学 文学修士	心と情報メディアに関するメディア構造論的研究
TAMURA Shunsaku 田村　俊作	文学研究科図書館・情報学専攻・教授	情報行動論 文学修士	心と情報メディアに関するメディア利用論的研究
SAKAGAMI Takayuki 坂上　貴之	社会学研究科心理学専攻・教授	行動分析学 文学博士	心と情報メディアに関する行動分析学的研究
NAKAGAWA Sumio 中川　純男	文学研究科哲学・倫理学専攻・教授	西洋古代中世哲学 文学修士	比較心性史的側面に関する比較思想史的研究
NISHIYAMA Yuji 西山　祐司	言語文化研究所・教授 （平成18年3月31日辞退）	言語理論 Ph. D.	心の知的働きに関する言語学的研究

５．交付経費（単位：千円）千円未満は切り捨てる　（　　）：間接経費

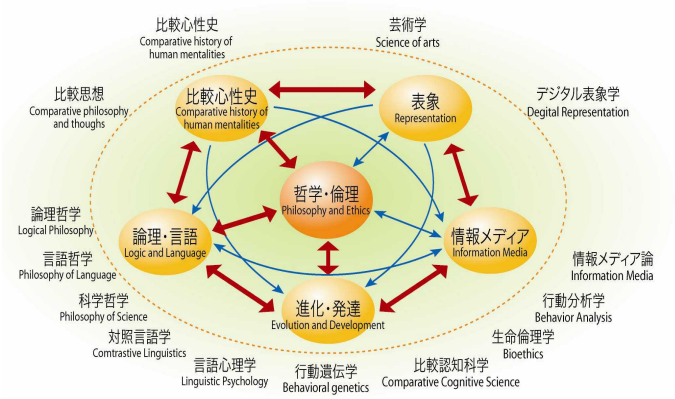
年　　度(平成)	１４	１５	１６	１７	１８	合　　計
交付金額(千円)	203,000	126,000	110,500	115,000 (11,500)	106,140 (10,614)	660,640

６．拠点形成の目的

「心」は人文科学のほぼ全ての分野と深い関わりをもちながら、いまだその全容の解明に至っていない最も重要な課題のひとつである。これまで従来の人文科学の諸分野の研究では各々の時代の新しい発見や知識、方法論を取り入れながら心の仕組みや振る舞い方、言語、思考、論理、感情、あるいは表象、文化という側面について様々な成果を挙げてきたが、その営為は専門化された個別的な方法論に基づいており、それぞれの間に本来求められるべき統合性に欠けていた。一方で人の心のハードな面ともいえる脳や中枢神経の構造、機能、形成、進化については近年の脳科学、神経科学、遺伝子生物学的方法論の進展によりそのメカニズムの解明が進んできている状況がある。本研究拠点形成の目的は、こうした「狭義の心」についての実験に基づく最新の研究成果を、心のソフトな面ともいえる「広義の心」についての伝統的な人文科学の方法論による研究成果のうえに位置づけ、あるいは逆に伝統的な人文科学の課題に実験的な手法を導入することにより、その全体的なコンテクストを明らかにすると共に、それら結果に対応しうる統合的な方法論を構築し、さらに文系、理系の各学問分野を横断する新しい国際的な研究拠点を形成することにある。



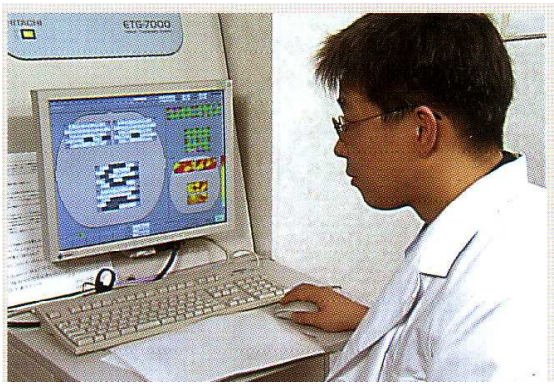
すなわち、本拠点は人文科学と実験科学の往復運動により、統合的な研究方法の構築を目指したものである。従来の哲学、倫理学、美学、心理学、教育学、言語学、文学研究などの伝統的な学問分野を越えて共通の課題にチャレンジする分野横断的な研究プロジェクトの立ち上げは、人文科学の個々の研究者にとって未知の知見を共有し、研究の奥行きを深める機会となるが、同時に、若手研究者にとっては新しい形での共同研究へ参加することを通じて将来の研究の幅を広げ、より柔軟なアプローチを可能とするチャンスともなる。パリのエコール・ノルマル・シュペリュール、ウィーン大学、コンラート・ローレンツ研究所をはじめとする海外研究機関との共同研究は、特に若手研究者にとっては国際レベルの研究者として活躍する場を与えることとなる。



そのために、上の図にある様な６つの班からなる研究チームを構成し、さらに研究期間の後半では、チーム間の統合を図る研究を行った。具体的に期待される成果としては、例えば「ヒトの心」に固有なものと見なされている推論、表象、言語などについて、その脳内機構の解明をめざすとともに、動物、幼児などの認知行動との比較実験を行い、発達、進化の全体的なコンテクストの中に位置づけ、さらにそこで得られた結果を様々な分野の統合的研究によって検証し、「ヒトの心」に固有な部分を明らかにしていくこと、あるいはその成果を文化、時代、民族に共通する部分と個別化した部分についての比較表象史、比較精神史的研究に応用していくことなどが挙げられる。人文科学全体の研究状況へのポジティブなインパクトが期待される所以である。

７．研究実施計画

６．の目的を達成するために、慶應義塾大学三田キャンパス近くに研究スペースとして「心の統合的研究センター」（CIRM）を設立し、光トポグラフィ、アイカメラ、脳波計をはじめとする実験研究設備を整えた。



また、研究員、事務スタッフによる支援体制も確立した。このCIRMを拠点として平成14、15年度は、第一段階として１）論理・言語、２）進化・発達、３）比較心性史、４）表象、５）情報メディアの５分野の研究プロジェクトを立ち上げ、それぞれの研究グループ内での融合的な研究活動を展開し、研究会、ワークショップ、シンポジウムなどを行った。

さらに15年度末にパリのエコール・ノルマル・シュペリュールの認知科学グループ、論理学グループ、情報学グループと共同主催した統合に向けた国際シンポジウム"Images,reason and reasoning"をきっかけとして、これらの研究グループを3つの分野横断的な共同研究プロジェクト、１）心と推論に関する統合研究、２）心の外界受容の統合研究、３）心と表象の統合研究に統合した。個々の統合研究の主な活動とその成果は以下の通りである。

１）　心と推論に関する統合研究：a）ヒトの推論が他の心的機能と同様に進化の過程で生まれてきた可能性を探るための、ヒトの図像ベースの推論と動物（ハト）の視覚に基づく推論行動の認知レベルでの統合的研究。b）世界最大規模の双生児データベース・サンプルを活用した幼児の発達研究による成人の推論の個体発生的変化の解明。c）ヒトの推論行為における言語の役割を明らかにするための、線形論理にもとづく最新の論理学的観点と遺伝発達科学的観点を統合した言語発達と論理推論能力の関係についての共同研究。

２）　心と外界受容の統合研究：a）脊椎動物の中で視覚による外界受容に優れているヒトと鳥類を対象とした同一の視覚認知課題の遂行、およびヒトについての事象関連電位と光トポグラフィ実験、鳥類についての神経活動と損傷実験による、脳内プロセスの比較研究。b）新生児から幼児、成人にいたるまでの外界受容について異なる媒体による認知の変化の比較研究。c）情報探索行動における嗜好性の問題についての光トポグラフィ、眼球運動、脳波計を用いての実験分析。

３）　心と表象の統合研究：外界の受容による内的表象の形成について a）非言語資料（図像）の理解における言語の役割の実験的検証。b）テクストと図像の内的表象形成における歴史的、文化的コンテクストの通時的比較分析。c)異種メディアにおける読書行動のアイカメラを用いた数値的、共時的研究。

これらの共同研究プロジェクトはその成果を国際シンポジウム（パリ、ウィーン、ブタペスト、東京など）で公開し、欧文報告書として出版してきており、国際共同研究拠点として統合的な研究環境を醸成した実績を持っている。

８．教育実施計画

次世代を担う若手研究者の育成はわが国の研究の発展のために不可欠であり、そのためには個々のテーマを自由に追求できる柔軟で充実した研究環境、研究に専念できる経済的な安定、研究成果が国際的に認知されるための発表の機会といったものが必要とされる。それと同時に従来の専門分野に縛られない分野横断的な広い視野、早くから国際的な研究環境に身をおくだけの研究能力も求められている。

すなわち、本COEでは、１）多分野にわたる知識と技能を持つ若手研究者、２）海外においても即戦力となりうる国際性を身につけた若手研究者、の育成を目指した。こうした目的を実現するために以下のような教育的取組を行ってきた。

１）研究発信支援：事業推進担当者、研究分担者となっている文学研究科、社会学研究科（心理学、教育学）の教員のみならず、それらの専攻に所属する若手の助手や大学院生、あるいは海外の大学に所属する若手研究者なども積極的に研究グループおよび共同研究プロジェクトに参加させ、国内外の学会、シンポジウム、研究会での成果の発表の機会や、海外の学会誌などに論文を掲載するための機会を与えるとともに必要な補助を行った。

２）専任研究員の雇用：各研究プロジェクトの研究、運営、補助などにあたる専任のＣＯＥ研究員（５名）を制度化し、また「心の解明」に密接に係わる国内外の研究者にリサーチフェローシップを与え、訪問研究員として一定期間CIRMに受け入れて安定した環境で共同研究に従事できるようにし、若手研究者の育成に努めてきた。

３）大学院生に対する研究補助：　後期博士課程の学生を中心に院生研究補助（平成15、16年度、各15件）および若手研究者補助（平成17、18年度、各20件程度）を公募し、審査のうえ決定した。事後に研究成果発表会を公開し、報告書として公刊した。

４）大学院正規科目としてのプロジェクト科目の設置：　「心の統合的研究センター」のプロジェクトを土台としてプロジェクト科目を大学院文学研究科、社会学研究科に設置し、修了者に修了証を授与した。この取り組みは17，18年度の「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択されている。

５）若手研究者、大学院生のオフィス・スペースの確保：「心の統合的研究センター」は研究設備のみならず、若手研究者、大学院生のためのディスク・スペースも確保した。このことにより、落ち着いた環境での研究ができ、また異分野の研究者との討論も活発に行われた。

こうした取り組みにより、本拠点を中心として、従来よりも早く国際的に通用する研究者を育成するための基盤が整備され、個別分野や専攻の枠組みを越えた新しい結びつきと国際的な共同研究体制のもとで、若手研究者のために今までにない自由で柔軟な研究環境が創出される結果となった。

９．研究教育拠点形成活動実績

①目的の達成状況

1)世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

想定以上の成果を挙げたと考えられる。本COE「心の解明に向けた統合的方法論構築」は学内的には、平成１８年度から先導研究センター内の「心の統合的研究センター」（CIRM）として位置づけられ、大学内の持続可能な研究教育拠点となった。この拠点で多くの研究者の参加による分野横断的な研究プロジェクトを６つ、共同研究プロジェクトを３つ起ち上げた。またケンブリッジ大学、パリ大学、エコール・ノルマル・シュペリュール、ウィーン大学などを国際共同研究拠点として実質的な活動実績を挙げ、これに基づいたパリ、ウィーン、ブタペストなどでの国際シンポジウムを開催し、多くの欧文刊行物を公刊してきた。

研究者育成の実も挙がっている。後期博士課程在学者、ポスドク、若手研究者による研究の支援、海外の学会発表、学会誌投稿の支援を積極的に行ない、その結果、研究職につく者や、多くの学術振興会特別研究員の採用が実現した。これらを総合的に判断すると人材育成についても当初の想定以上の成果を挙げたと考える。

2)人材育成面での成果と拠点形成への寄与

本COEからは２名の特別研究教員を輩出し、拠点の中核的研究員となっている。また、本COEが支援した大学院生は活発に研究成果を挙げることにより、その多くが学術振興会の特別研究員に採用されている。また、産業技術総合研究所、エコール・ノルマル・シュペリュールなどに研究員として採用された若手研究者もおり、人材育成には一定の成果を挙げたと評価できる。

3)研究活動面での新たな分野の創成と、学術的知見等

本COEが目指したものは、異なる分野の統合的研究であった。そのようなものとして以下のものが挙げられる。

１）論理研究と動物の行動実験を統合したanimal logicという分野を開拓し、Animal Logicというタイトルの特集号をウイーン大学との共同編集で*Animal Cognition*誌から刊行した。

２）美的判断にともなう脳内活動の測定を行い、神経美学(Neuro-Aesthetics)という新分野の創設者である英国のZeki教授を招聘して美学者、神経科学者をふくめたセミナーを開催し、当該分野に貢献した。また、動物実験によって美的判断の系統発生を探求する動物美学(Animal Aesthetics)という新分野を提唱した。

３）従来から慶應で行われてきた双生児研究と論理判断の研究を結び付け、論理判断における遺伝素因を探るとともに、判断時の脳内活動の測定を行った。

４）言語学者との連携により、ヒト言語の音韻的弁別が鳴禽でも可能であることを明らかにした。

５）近赤外線による脳内活動の測定と薬理学を結びつけた薬理光トポグラフィ(Pharmaco-NIRS)という分野を世界に先駆けて創設し、抗ヒスタミン薬の認知機能におよぼす効果を明らかにした。この成果は新聞紙上でも取り上げられ、多くの反響があった。

4)事業推進担当者相互の有機的連携

５）で述べたように、多くの研究は異分野の研究者による共同研究であり、国際シンポジウムでも異分野の研究者による共同企画のものが行われた。例えば、パリで行われた論理と推論に関するシンポジウムでは数学者、哲学者から実験心理学者、動物

行動学者までを含む会議であり、国際動物行動学会議の招待シンポジウムとしてブダペストで行われた異種間コミュニケーションのシンポジウムでも、文化人類学者や哲学者も参加した。すべての分野でこのような有機的連携が成功した訳ではないが、常に研究統合へ向けた取り組みを続けた。

5)国際競争力ある大学づくりへの貢献度

研究面では海外の大学、研究組織との国際共同研究体制の構築を積極的に行った。海外の研究機関との連携は従来研究者の個人レベルで行われてきたが、本COEでは、提携文書を取り交わして機関レベルでの提携とした。

現在、ケンブリッジ大学、ウイーン大学、パリ大学、エコール・ノルマル・シュペリュール、ビーレフェルト大学とこのような提携関係にある。また、実際にこれらの研究機関との共同研究も行われ、その成果の一部はすでに出版されている。

教育面では、若手研究者の国際会議での発表を積極的に支援した。そのことにより、多くの若手研究者が世界のトップレベルの研究者と直接討論する機会を得、その結果としての研究所訪問など通じて、世界的研究者とのネットワークが今まで以上に拡がった。また英文ホームページの開設や欧文刊行物の出版により海外の若手研究者からの直接の接触も増加している。

慶應義塾大学の世界大学ランキングは数年の間に上昇しているが、研究レベル、教育レベルでの国際競争力という点で、本拠点も少なからず貢献していると考える。

6)国内外に向けた情報発信

国内的には「心の統合的研究センター」のホームページに加えて、年4回のニュースレターの発行、年度毎の成果報告書、若手研究補助成果報告書の発行、各研究プロジェクトからの論文集、国際シンポジウムの報告書を発行した。公開シンポジウムは総計１７４回開催し、多くの学外からの参加者があった。

社会的な情報発信としてのプレスリリースは平成１５年の「知恵の輪遂行中の脳血流変化」から平成１９年の「抗アレルギー薬による認知課題遂行中の脳血流変化」にいたるまで５回行い、いずれも全国紙で取り上げられ、その結果テレビ取材なども行われた。この中にはフランス国営テレビによる番組もあった。

国際的な情報発信としては英文のホームページを開設した。また、英文出版をシリーズで計１２冊刊行し、海外の主要研究拠点に配布した。それらの刊行物の中には海外の著名な研究者が推薦文を寄せてくれたものもある。国際シンポジウムは計２４回行い、それにもとづいた国際誌の特集号なども編纂された。

7)拠点形成費等補助金の使途について（拠点形成のため効果的に使用されたか）

研究スペースの確保、研究支援のためのスタッフの人件費、情報基盤(サーバなど)の整備、といった研究教育のためのインフラ整備を行うとともに、脳磁気刺激装置、アイカメラ、脳波計などの先端的研究設備を導入した。特に日立光トポグラフィは日本が世界に先駆けた新技術であり、本COE

で導入した全頭型の装置は世界で４番目に納品された機械であった。幸い、多くの世界に先駆ける研究成果を挙げることができた。また、国際シンポジウム、ワークショップ、研究会などの経費、若手研究者のための研究補助なども主な使途であり、平成19年5月の会計検査院の検査でも特に指摘を受けることはなく、適正に執行された。

②今後の展望

大学全体として外部資金による研究プロジェクトを展開するために新たに先導研究センターを設立し、本拠点はその中に「心の統合的研究センター」として位置づけられている。またCIRMを継続、発展していくためにCOE中間評価が高かった分野を中心として「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」をグローバルCOEに申請し、より広い視点から国際共同研究拠点の形成を目指している。

そのために、海外研究機関と、教員の交流、大学院生の交流、共同セミナー、共同研究を内容とする機関提携をむすび、すでに具体的な研究、教育の計画も建てられている。また、大学院の正規科目として、文学研究科、社会学研究科にまたがるプロジェクト科目を設置し、研究プロジェクトへの参加がそのまま大学院の単位となる制度を確立したので、今後分野横断的研究、教育の活性化が期待できる。さらに、三田キャンパスに研究施設の整備が予定されており、より高次な研究教育拠点形成の準備がなされている。

③その他（世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度）

学内への影響は次の２点である。

第１点は先導研究センターという機構が作られ、本COEはその中の「心の統合的研究センター」として位置づけられた点である。これは本COEの研究が今後も持続することを学内的に保証するものである。

第２点は大学院の研究科を超える研究、教育の制度が実現したことである。従来から研究者の個人レベルでは、このような共同研究が行われてきたが、それを制度として確立した。特に、研究科横断的なプロジェクト科目の設置は、文学研究科、社会学研究科のみでなく、今後の大学院教育に大きな影響を与えることになる。

国内の学外での影響としては、心の研究に関わる他のCOEとの連携が挙げられる。COE発足と同時に日本基礎心理学会との連携で、COEサミット「２１世紀、基礎心理学は心の解明にどのように関与できるか」を開催し、５大学のCOE拠点で討議を行った。その後、不定期ではあるが、これらの拠点間での情報の交換や共同セミナーが行われた。

国外への影響では、日本で国際シンポジウムを開催して海外の研究者を招聘するばかりでなく、海外での国際シンポジウムを積極的に主催し、その際にCOE主催であることを明示した。その結果、本COEの知名度が上がり、有力な海外研究拠点と機関提携を結び、持続可能な研究、教育の協力態勢を構築することができた。

２１世紀ＣＯＥプログラム　平成１４年度採択拠点事業結果報告書

機　関　名	慶應義塾大学	拠点番号	Ｄ１５
拠点のﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ名称	心の解明に向けての統合的方法論構築		

１．研究活動実績

①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】

拠点刊行物

Shigeru Watanabe,Michel A.Hofman,*Integration of Comparative Neuroanatomy and Cognition*,CIRM/Keio University Press,2007.

表象A・B班研究展覧会の記録『テクスト・イメージ・コンテクスト「みること」の心性』,CIRM/慶應義塾大学出版会,235pp,2007.

前田富士男,『『心の探究者としてのパウル・クレー』,CIRM/慶應義塾大学出版会,230pp,2007.

佐藤道生,『句題詩研究：古代日本の文学に見られる心と言葉』,CIRM/慶應義塾大学出版会,181pp,2007.

和泉雅人・松村友視,『近代的心性における学知と想像力：Techne and Fantasmagoria in Modern Mentality』,CIRM/慶應義塾大学出版会,280pp,2007.

Neil B.McLynn,Sumio Nakagawa,Taro Nishimura,*Corners of the Mind: Classical Traditions, East and West,* ,CIRM/Keio University Press,236pp,2007.

J.Benoist,J-Y. Girard,T.Iida,Y.Ogawa,M.Okada,Y.Saito,R.Takemura ,*ESSAYS IN THE LOGICAL AND PHENOMENOLOGICAL STUDIES: Interdisciplinary Conference Series on Reasoning Studies,* Vol.3 ,CIRM/Keio University Press,167pp,2007.

Daniel Andler,Yoshinori Ogawa,Mitsuhiro Okada,Shigeru Watanabe,*Reasoning and Cognitiona: Interdisciplinary Conference Series on Reasoning Studies,* Vol.2 ,CIRM/Keio University Press,294pp,2006.

Pierre Grialou,Guiseppe Longo,Mitsuhiro Okada,*Images and Reasoning: Interdisciplinary Conference Series on Reasoning Studies,* Vol.1,CIRM/Keio University Press,218pp,2005.

Jocelyn Benois,Jean-Yves Girard,Yoshinori Ogawa,Mitsuhiro Okada,*Towards New Logic and Semantics :Franco-Japanese Collaborative Lectures on Philosophy of Logic* ,CIRM/Keio University Press,263pp,2006.

Kawaguchi,J.,K.Kida,K.Maejima,*Cognition et émotion dans le langage*,CIRM/Keio University Press,274pp,2006.

Takami Matsuda,Kenji Yoshitake,Masato Izumi and Michio Sato,*The Minds of the Past: Representations of Mentality in Literary and Historical Documents of Japan and Europe*,CIRM/Keio University Press,260pp,2005.

Shigeru Watanabe,*Comparative Analysis of Mind*,CIRM/Keio University Press,281pp,2003.

発表論文名・著書名

Neil B.McLynn, Sumio Nakagawa, Taro Nishimura, ἀωτος Revisited -Some Aspects of Pindar's Vocabulary,*Corners of the Mind:Classical Traditions, East and West,* CIRM/Keio University Press, 53-73,2007.

西村太良「イーリアス」写本をめぐる諸問題Ⅰ－Thomas Phillipps MS 138771」,中川純男編『西洋精神史における言語観の諸相』,慶應義塾大学言語文化研究所,113-27,2002.

Hirohiko Kushida and Mitsuhiro Okada, A proof-theoretic study of the correspondence of classical logic and hybrid logic, Journal of Logic,Language and Information,vol.16,Number1,35-61,January 2007.

M.Kanovich, M.Okada and K.Terui, Intuitionistic phase semantics is almost classical, Mathematical Structure in Computer Science,vol.16,1-20,Feb.2006.

Mitsuhiro Okada, Linear Logic and Intuitionistic Logic, La revue internationale de philosophie, No.230, pp. special issue "Intuitionism",449-481,2004.

H.Kushida and M.Okada, A proof-theoretic study of the correspondence of classical logic and modal logic, Journal of Symbolic Logic,vol.68,4,1403-1414,2003.

MaxI.Kanovich, Mitsuhiro Okada, Andre Scedrov, Phase Semantics for Light Linear Logic, Theoretical Computer Science,294,525-549,2003.

Watanabe,S.,& Huber.L.,Animal logics: Decisions in the absence of human language.,Animal Cognition,9, 235-345.2006.

Saito,K.,& Watanabe,S.,Spatial memory activation of the parietal cortex measured with near-infrared spectroscopic imaging in the fnger-maze of the Morris ater maze analogue for human.,Reviews in Neurosciences,17,227-238,2006.

Watanabe,S.,Yamamoto,E.,& Uozumi,M.,Language discrimination in Java sparrows.,Behavioural Processes,70, 203-208,2006.

Awaya,F.,& Watanabe,S.,IMHV lesions caused deficits in conspecific discrimination in chicks but not in adult quails.,NeuroReport,14,1511-1514,2003.

渡辺茂,小嶋祥三,『脳科学と心の進化』,岩波書店,2007.

Yamagata,S.,Suzuki,A.,Ando,J.,Ono,Y.,Kijima,N.,Yoshimura,K.,Ostendorf,F.,Angleitner,A.,Riemann,R., Spinath,F.M.,Livesley,W.J.,& Jang,K.L.,Is the genetic structure of human personality universal ? A cross-cultural twin study from North America,Europe, and Asia. Journal of Personality and Social Psychology,90,987-998.2006.

Jang,K.L.,Livesley,W.J.,Ando,J.,Yamagata,S.,Suzuki,A.,Angleitner,A.,Ostendorf,F.,Riemann,R., &Spinath,F.M.,Behavioral genetics of the higher order factors of the Big Five.,Personality and Individual Differences,41,261-272.2006.

Shikishima,C.,Ando,J.,Ono,Y.,Toda,T.,& Yoshimura,K. Registry of adolescent and young adult twins in the Tokyo area. "Twin Research and Human Genetics"9,811-816,2006.

Yamagata,S.,Takahashi,Y.,Kijima,N,Maekawa,H.,Ono,Y.& Ando,J.,Genetic and environmental etiology of Effortful Control,Twin Research and Human Genetics,8,300-306.2005.

Ando,J.,Suzuki,A.,Yamagata,S.,Kijima,N.,Maekawa,H.,Ono,Y,& Jang,K.L.,Genetic and environmental structure of Cloninger's temperament and character dimensions.Journal of Personality Disorders,18,379-393,2004

西脇与作『科学の哲学』慶応義塾大学出版会，500pp．2004.6.
西脇与作「ミクロとマクロ　その統一の謎」,現代思想,vol.33-11,10月号,144-156,2005.
西脇与作「確からしさ」から「確かさ」へ」,科学基礎論研究 第103号,21-30,2004.
西脇与作『科学の哲学』慶応義塾大学出版会，500pp．2004.6.
西脇与作「科学の中の一般性と個別性」（分担執筆）『看護研究』ｱｰｶｲﾌﾞｽ(中島紀恵子,中西睦子,前原澄子,南裕子編),医学書院,2003.4
飯田　隆『クリプキ ことばは意味をもてるか』NHK出版,2004.
飯田　隆「ゲーデルと哲学 ― 不完全性・分析性・機械論」,『ゲーデルと20世紀の論理学１ ゲーデルの20世紀』田中一之編,東京大学出版会,111-169,2006.
飯田　隆「文の概念はなぜ必要なのか」,『哲学の探求』,第31号,119-131,2004.
飯田　隆「『概念記法』の式言語はどんな言語なのか」 『思想』2003年10月号，106-122頁，2003.
飯田　隆 “Frege and the Idea of Formal Language” Annals of the Japan Association for Philosophy of Science Vol.12,No.1,15-23,2003.
斎藤慶典『レヴィナス　無起源からの思考』,講談社,2005.
斎藤慶典『心という場所 「享受」の哲学のために』,勁草書房,2003.
斎藤慶典『フッサール　起源への哲学』,講談社,2002.
斎藤慶典「愛の不可能性,あるいは倫理」,『思考』989号,岩波書店,26-40,2006.
Saito Yoshimichi, ”Die Seinsproblematik bei Heidegger und das Problem des Anderen”,in *Levinas’Ethik im Kontext*, Christian Kupke(Hg.),Parodos Verlag Berlin,169-183,2005.
伊東裕司『目撃供述聴取の手順と記録法』季刊刑事弁護,No.35,153-156,2003.
矢野円郁・伊東裕司『再認記憶の確信度評定に及ぼす親近性と意識的想起の影響』心理学研究.75,324-330,2004.
ITOH,Yuji., The facilitating effect of verbalization on the recognition memory of incidentally learned faces.Applied Cognitive Psychology,19,421-433,2005.
Itsukushima,Y.,Hanyu,K.,Okabe,Y.,Naka,M.,Itoh,Y.,& Hara,S.,Response conformity in face recognition memory. In Nilsson,L.& Ohta,N.(Eds.) Memory and Society: Psychological perspective. London,New York:Psychology Press,159-169,2006.
大津由紀雄.「「子ども主体の言語発達研究」の本質を問う --生成文法と対比させて」『児童心理学の進歩2003年度版』金子書房.286-291,2003.
大津由紀雄,今西典子.「言語」大津由紀雄・波多野誼余夫（編）『認知科学への招待』研究社,77-90,2004.
大津由紀雄,今西典子.「言語獲得研究の新展開」『英語青年』150,10,630,2005.
大津由紀雄.「原理なき英語教育からの脱却を目指して ---言語教育の提唱」大津由紀雄（編）『日本の英語教育に必要なこと』慶應義塾大学出版会,11-32,2006.
OTSU,Yukio.“On The Usage-Based Model of Language Acquisition” Studies in Language Sciences 7,31-32,2007.
川口順二,喜田浩平,前島和也,「感情表現をめぐって」,『フランス語学研究』38,90-97,2004.
川口順二.「借用英語をめぐって―フランス語の中の英語」,『藝文研究』89,1-17,2005.
川口順二.「感情の言語表現をめぐって」,『フランス語学研究の現在』白水社,263-283.2005.
川口順二.「Expressions linguistiques de l’émotion : Traductions intratextuelle / intertextuelle et interjections」, in Kawaguchi,J., K.Kida et K.Maejima (éds.), *Cognition et émotion dans le langage*,Keio University, Centre for Integrated Research on the Mind,257-268,2006.
川口順二.「モダリティ動詞aller」,in『藝文研究』91-1,1-19,2006.
Takami Matsuda, Kenji Yoshitake, Masato Izumi and Michio Sato,“Hopton Hall MS, fols 9v-13r: An Unpublished Prose Text on the Keeping of the Law of God and a Form of Confession”, in *The Minds of the Past: Representations of Mentality in Literary and Historical Documents of Japan and Europe*, 75-83.
松田隆美「中世英語の宗教写本におけるcompilatioとordinatio－Bodl. Libr. MS Douce 322を中心に－」飯田隆編『西洋精神史における言語と言語観－継承と創造』慶應義塾大学言語文化研究所283-303.2006
松田隆美他『テクスト・イメージ・コンテクスト－みることの心性』CIRM/慶應義塾大学出版会,2007
前田富士男『伝統と象徴――美術史のマトリックス』（編著）,沖積舎,2003.
前田富士男・河本英夫『哲学をつくる』（東洋大学哲学講座３,共著）,知泉書館,2005.
前田富士男・宮下誠・いしいしんじ『パウル・クレー　絵画のたくらみ』（共著）,新潮社,2007.
前田富士男『心の探究者としてのパウル・クレーPaul Klee als Seelenforscher』（編著）,慶應義塾大学出版会,2007.
前田富士男「記憶としての造形空間とカウンター・モニュメント――イサム・ノグチ《ノグチ・ルーム》におけるトポスとサイト」,『記憶としての建築空間―イサム・ノグチ／谷口吉郎／慶應義塾』（ブックレット13号）,慶應義塾大学アート・センター,136-162.2005.
鷲見洋一『繁殖する自然　博物図鑑の世界』慶應義塾大学図書館,全212頁,2003.
Y.Sumi,’Le Moulin dans les panoramas du monde’,*Le Travail des Lumières pour Georges Benrekassa* Edité par Caroline Jacot Grapa, Nicole Jacques-Lefèvre, Yannick Séité et Carine Trevisan, Honoré Champion, 39-55, 2002
Y.Sumi, De la Cyclopaedia à l’Encyclopédie – traduire et réécrire *Sciences musiques Lumières– Mélanges Anne-Marie Chouillet,* publiés par Ulla Kölving et Irène Passeron, Centre international d’étude du XVIIIe siècle,Ferney-Voltaire,409-419,2002.
TAMURA,Shunsaku,MIWA,Makiko,SAITO,Yasunori,KOSHIZUKA,Mika,KASAI,Yumiko,MATSUBAYASHI,Mamiko,IKEYA,Nozomi. Information sharing between different groups.Information Research,vol.12,no.2,2007.
安形麻理,石川透,上田修一,田村俊作,瀬戸口誠「読書史の中の読書画像」第54回日本図書館情報学会研究大会発表要綱,73-76,2006.
Neil B.McLynn,Sumio Nakagawa,Taro Nishimura, *Corners of the Mind Classical Traditions, East and West,* (Tokyo: Centre for Integrated Research on the Mind /Keio University Press,2007.
NAKAGAWA, Sumio,Recollection and Forms in Plato’s *Phaedo, Hermathena, Essays on the Platonic Tradition*, ed. John Dillon,No.169,57-68,2002.
中川純男「生の滞りなさ　―初期ストア派の倫理学とその前提」,『思想』,岩波書店,26-44,2005.
中川純男「アウグスティヌスにおける確実性の概念－『告白』第七巻から－」,『パトリスティカ』第9号,128-140,2005
中川純男「認識の様態－トマス認識論の基本原理」,『中世哲学研究』第24号,1-19,2005
中川純男「初期ストア派の倫理学における「自然本性」の概念,『ギリシャ哲学セミナー論集』4,64-77.2007.

②国際会議等の開催状況【公表】

（事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数（うち外国人参加者数）、主な招待講演者（３名程度））

1. 2002/12/2・慶應義塾大学G-SEC Lab COE、"International Symposium on comparative cognition"、50名(3): Clayton.N.S., Huber.L., Emery.N.J, 他
2. 2003/8/20～27・ブラジル フロリアナポリス、第28回国際動物行動学会議でのシンポジウム「鳥類認知能力の神経機構」、70名(65):清水透,山崎由美子, Ludwog Huber ,他多数
3. 2003/10/2・慶應義塾大学G-SEC Lab、国際シンポジウム Origin of "Work Ethics"、25名(2): T.R.Zentall
4. 2003/12/10・慶應義塾大学G-SEC Lab、シンポジウム「意識研究」の学際的方法論を求めて、50名(3): Joseph Goguen, Piet Hut, 杉下守弘,他
5. 2004/3/15・フランス パリ、エコール・ノルマール・シュペリュール、シンポジウム"Images,reason and reasoning"、50名(45): Ludwig Huber, Barbara Tversky, Dieter Lohmar,他
6. 2004/3/29.30・慶應義塾大学G-SEC Lab、COE線形論理国際研究集会（Linear Logic and Proof Theory Meeting)、40名(7): Jean-Yves Girard, Thomas Ehrhard, Pierre-Louis Curien,他
7. 2004/6/27・慶應義塾大学北館ホール、COEシンポジウム「Co-responses on the Borderline - 境界線上に立って、互いに応答する・日韓女性のアートと心」、150名(5):Rebecca Jannison,Lee Chong-wha,Park Youngsook,他
8. 2004/10/12・慶應義塾大学G-SEC Lab、日仏共同シンポジウム「“デジタルアート：ニューテクノロジー、創造、社会”シリーズ：ニューメディアの美学/ヴァーチャルイメージの認知科学」、97名(18): Nicolas Bourriaud, Anne-Marie Duguet, Jean-Pierre Balpe,他12名
9. 2004/11/17・オーストリア ウイーン Konrad Lorenz Institute for Evolution and Cognition Research、"Symposium on Animal Logics"、50名(45): Thomas Bugnyar, Ludwig Huber, Gavin R Hunt, 他10名
10. 2004/12/21・慶應義塾大学研究室棟A・B会議室、シンポジウム「浮世絵をみる眼/浮世絵を感じる心」、25名(2): Timon Screech
11. 2005/2/23・慶應義塾大学G-SEC Lab、Cloninger教授招待講演"Psychobiology of Human Personarity",60名(3): C.Robert Cloninger
12. 2005/3/18・慶應義塾大学G-SEC Lab、第７回NIRS(光トポグラフィ）シンポジウム「Hellmuth Obrig教授講演会」、20名(2): Hellmuth Obrig
13. 2005/3/23.24 ・慶應義塾大学東館ホール、A Proof Theory Workshop (with Lecture Series by Jean-Yves Girard) 40名(2)：Jean-Yves Girard, Kohei Suenaga, Masahiro Hamano,他
14. 2005/7/25・慶應義塾大学G-SEC Lab、シンポジウム"Convergence and divergence of mind"、30名(2): Nicola S. Clayton, Masaki Tomonaga, Nobuyuki Kutsukake
15. 2005/8/23・ハンガリー ブダペストEötvös University Convention Center、Symposium on" Intra and inter species communication -integration of ethology and ethnology - "at International Ethological Conference 2005、30名(28): Dominique Lestel,Irene M.Pepperberg ,Eileen CRST,他
16. 2005/12/19-21・慶應義塾大学G-SEC Lab、国際シンポジウム"Reasoning and Cognition Reasoning"（フランス大使館との共催）、125名(18): エコール ノルマール シューペリュール（パリ）から11名、小泉英明、嵯峨山茂樹、金子邦彦、塾内（塾長 安西祐一郎、他多数）
17. 2005/12/21・早稲田大学、シンポジウム「舞踏のクリエーションと教育－ロンドンにおける専門教育を事例にしてー」、30名(3): カレン・グルーンホフ、片岡康子、大貫秀明、松澤慶信
18. 2006/2/10・慶應義塾大学G-SEC Lab、シンポジウム「心の探求者としてのパウル・クレー」、101名(5): Reto Sorg 、Wolfgang Kersten、行場次朗、三脇康生、野口薫、奥田修
19. 2006/4/15・慶應義塾大学西校舎、シンポジウム"Romance and Chronicle in Malory, Caxton, and John Hardyng" 、40名(2): Masako Takagi、Sarah Peverley、E. D. Kennedy
20. 2006/8/27-8/28 ・慶應義塾大学東館ホール、国際シンポジウム"Integration of Comparative Neuroanatomy and Comparative Cognition"、51名(10): Harry J. Jerison、Alan C. Kamil、Michel A. Hofman、Edward A. Wasserman、Martin Wild、Toru Shimizu、Hiroyuki Uchiyama
21. 2006/8/31・国立オリンピック記念青少年総合センターカルチャー棟、国際シンポジウム"Evolution of brains" 、100名(5): Harry J. Jerison、Michel A. Hofman、Toru Shimizu
22. 2007/3/13・慶應義塾大学東館ホール、国際シンポジウム"Reasonong and Cognition07" 、40名(8) H-J. Bischof (University of Bielefeld)、Sid Kouider (LSCP)、Dominique Lestel (DEC-ENS)、Friederike Moltman (IHPST, Université Paris I)、他
23. 2007/3/15・慶應義塾大学研究室棟、"International Round Table Symposium on Avian Visual Cognition"、20名(3) Hans-Joachim Bischof (Univ. Bielefeld)、Juan Carlos Letelier Paraga (Univ. Chile & Univ.Tokyo)、Hans Pottstock-Vidal (Univ. Chile)、H.Uchiyama (Kagoshima Univ.)、他
24. 2007/3/26・3/28・慶應義塾大学東館ホール、 国際シンポジウム"Round Table Symposium on Proof Theory, Linesr Logic and Program Semantics"、40名(8)： Jean-Yves Girard, Samuel Tronçon, Domiano Mazza, Michele Pagani, Gergely Bana, Emmanuel Beffara, Pierre-Louis Curien, Claudia Faggian, Masahito Hasegawa,他

以上

２．教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

「大学院後期博士課程在学者対象研究費補助」

実施時期：平成１４年度、１５年度、１６年度(各1年間)

採択件数（人数）：平成１４年度１５件、平成１６年度１５件、平成１６年１５件、合計４５件

概要：大学院後期博士課程在学者を対象に研究費の補助を行った。補助金額は３０万円とし、対象専攻である文学研究科各専攻および社会学研究科心理学専攻・教育学専攻から１名ずつを助成対象とした。申請時に提出した研究計画書に沿って研究を行い、支給された補助金は期内に使い切り、収支簿と実績報告書の提出を義務づけた。

「若手研究補助若手研究者対象研究費補助」

実施時期：平成１７年度、１８年度（各１年間）

採択件数（人数）：平成１７年度１８件、平成１８年度１４件、合計３２件

概要：本プログラムの研究課題である「心の解明に向けての統合的方法論構築」に深く関わる分野の研究を計画する若手研究者に対し、研究費と発表の場を提供し、若手研究者としての具体的な研究成果（たとえば博士論文の完成や学位取得後の国際水準の研究）の促進に寄与することを目的とする。この若手研究者は関連する対象領域の共同研究活動に、積極的に参加することが望ましい。また学会発表、論文発表の他、年度末の成果報告書の提出と成果報告会での発表を条件とする。

・給付金額：　２０万円～８５万円(交付内容による)

・応募資格：平成17年5月1日現在、慶應義塾大学大学院文学研究科および社会学研究科(心理学、教育学専攻に限る)後期博士課程在籍者、または同研究科後期博士課程入学後6年以内の若手研究者で、本プログラムの推進に貢献する研究を行うもの(年齢制限無し)。尚、COE研究員や過去にＣＯＥ院生補助を受けた者も対象となる。また平成17年度の若手研究者対象研究費補助を受けた者も、次年度連続して応募することが可能である。

・実績：

「平成１７年度若手研究成果報告会」　2006年2月6日開催　18名が成果を発表し44名が参加した。

「平成１８年度若手研究成果報告会」　2007年2月5日開催　14名が成果を発表し39名が参加した。

『平成１７年度若手研究成果報告書』　18名の報告書を印刷製本し、500部を研究機関等へ配布した。

『平成１８年度若手研究成果報告書』　14名の報告書を印刷製本し、500部研究機関等へ配布した。

機関名：慶應義塾大学　拠点番号：Ｄ１５

２１世紀ＣＯＥプログラム委員会における事後評価結果

（総括評価）

設定された目的は十分達成され、期待以上の成果があった

（コメント）

研究教育拠点形成計画全体については、委員会より多領域を含む計画ゆえに総花的にならないよう出発にあたって注意を促したが、それを十分に踏まえ、結果的には、１）心と推論、２）心と外界受容、３）心と表象、に整理し、それぞれの部門で著しい成果を上げるとともに、また部門相互の連携による総合的見通しの確立に向けての共同作業もおろそかにすることなく成果を上げた。また、海外の大学、研究機関との共同研究も、単発的なシンポジウム等に終わることなく長期にわたる研究交流をくりひろげて着々と成果を上げ、国際競争力ある大学づくりに大きく貢献している。

人材育成面では、ＣＯＥ研究員を中心とする若手研究者の研究活動、外国大学等との交流活動への参加によって研究活動が活性化され、拠点形成後、課程博士の授与数が飛躍的に増加したことは高く評価できる。

研究活動面では、中間評価コメントに対応して光トポグラフィによる脳研究と論理的･倫理的・美的判断の研究成果の間の連携で成果を上げ、感情表現の対照言語学研究、古代･中世哲学の側からの言語論的研究がこれらに呼応しつつ見るべき成果を上げた。倫理判断、倫理意識の基礎となる社会的認知についての光トポグラフィによる研究の成果などは、国際的に見ても最先端に位置する成果として今後の更なる研究の進展が期待される。

補助事業終了後の持続的な展開については、前記の三つの部門の間の連関がようやく緒についたところで、連携の十分でない点もなお散見され、今後なお一層の困難が予想されるが、引き続き総花的にならないよう十分に留意して研究活動を進めれば、今後、多分野連携に基づく多くの具体的成果が期待できる。